

イスラーム民主主義の現在：理念と実践および 21 世紀的課題群

2006. 1. 21

小杉 泰

(京都大学)

はじめに——論点の見取り図

- (1) 誰が「イスラーム民主主義者」か
- (2) イスラーム思想の民主性／市場性
- (3) イスラーム民主主義の理論的根拠：シェーラー論
- (4) イスラームと民主主義をめぐる戦い

1. 誰が「イスラーム民主主義者」か

- (1) 民主主義をめぐるイスラーム世界のなかでの考え方
 - a) イスラームはイスラーム、民主主義は西洋思想 (→無関係、対立)
 - b) イスラームは民主主義 (民主主義の定義≡イスラーム)
 - c) イスラームは民主的 (≠民主主義)
 - d) イスラームは「本来の意味で民主主義」(イスラーム民主主義)
 - e) イスラームは民主主義 (民主主義の定義=西洋的民主主義のこと)
- (2) 私たちが「民主主義」と言う場合
 - ・自由民主主義 (≡リベラル・デモクラシー)
 - ・日本風な民主主義 (いちおう自由民主主義)
 - ・ヨーロッパでの民主主義の種類を前提とした民主主義
 - ・プラトンの意味での民主主義
 - ・規範的民主主義／手続き的民主主義
- (3) 以下では、民主主義と自由主義を分離する (あるいは平等と自由を分離する)
そして、問い：イスラームは自由主義か
首肯するのは、e) 「イスラームは (西洋的) 民主主義」という人びと (のみ)
イスラーム≠リベラリズム
なぜ？ イスラームは社会契約説と個人主義を採用しない
イスラームは「ウンマ主義」(ウンマ=共同体=社会)
人間は「社会的動物」=社会性をビルトインされた存在=関係論的人間観

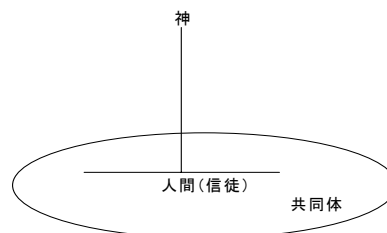


図1 神との契約 (垂直軸) と共同体原理 (水平軸)

(4) イスラーム世界の「中道派」の位置づけ

中道派＝穏健な大多数（穏健とは、思想的穏健性）

「中道」は常に、左右の真ん中 → 時代によって位置づけが変わる

19世紀末～20世紀前半：伝統墨守的イスラームと欧化主義の間

現在：イスラーム急進主義と世俗主義（≡反イスラーム主義）の間

→ 2つの反民主主義の間

中道派は、広義の「イスラーム社会」の実現をめざす諸勢力・諸潮流

そのためには、ムスリム全体の自覚的な参画が必要と考える

→ a) 理念として、イスラーム的民主主義の構築をめざす

b) イスラームの民主性を信じる

c) 目的として、政治参加の実現を求める

2. イスラーム思想の民主的／市場的性格

(1) イスラーム思想の正しさを誰が決めるか

イスラーム＝イスラームをめぐる諸解釈＝イスラームを名乗る諸思想

「名付けえぬイスラーム」

教会・公会議・僧団などを持たないイスラーム

(2) イスラーム思想の市場メカニズム

ウンマが最終的に「あるべきイスラーム（の思想）を決める」という考え方

不変の啓典（クルアーン）のテキスト、多様な解釈

決定を行なう制度がないため、ゆるやかなコンセンサス形成がなされる

「市場」というメタファー

(3) 諸法学派の成立と競合

「消滅した学派」：バグダーディー学派、タバリー学派、ザーヒル学派など

一般信徒は法学者に従う

ただし、誰に従うかは選択できる

人気を得るポイント：

a) 啓典などの解釈の説得性・整合性

b) 法規定の合理性・便宜性

c) 法学者の才能・資質、学派の組織力

d) 支持者の熱心さ（一般信徒、有力者のパトロネージ）

e) 王朝の「公式学派」としての採用

16世紀頃までに、「寡占状態」と「市場の均衡」

今日に至る学派の地域的寡占状態

18世紀以降の市場の流動化

3. イスラーム民主主義の理論的根拠：シューラー論

(1) シューラー（協議、話し合い）

「互いの中で協議（シューラー）を旨とし」（シューラー章 38 節）

「諸事について彼らと協議せよ」（イムラーン家章 159 節）

(2) シューラーの義務性・拘束性

		統治者は協議の結果（内容）に拘束されるか？	
		随意に採用	採用が義務
統治者は協議をすべきか	任意	初期イスラーム ウマイヤ朝、アッバース朝	×
	義務	13世紀以降 現サウディアラビアなど	イスラーム民主主義 イランなど

シューラーはウンマ内の意思決定メカニズム（の一部）
 ウンマを外から拘束している事項を勝手に変えることはできない
 ウンマ内に複数の公権力（国家）が成立していれば、それぞれのなかでシューラー
 国家内の決定は、ウンマでの決定を勝手に変えることはできない

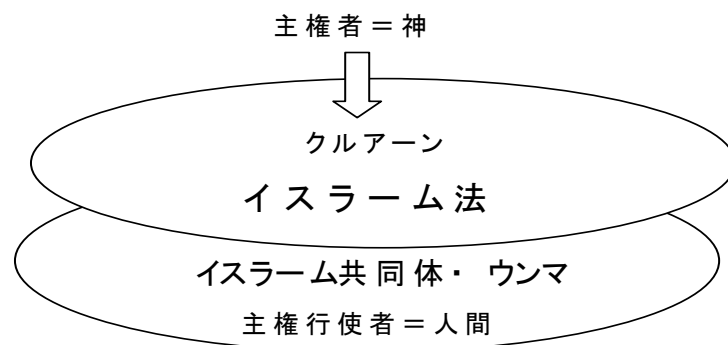


図2 主権と主権行使権

4. イスラームと民主主義をめぐる戦い

(1) イスラーム復興と民主化

1960年代後半以降の「イスラーム復興」

1979年：イラン・イスラーム革命 → イスラーム共和制、選挙制度、複数政党制
 （王政・王朝権力の打倒、一党独裁の廃止、近代化による脱イスラームの打破）

ネオ・オリエンタリズム論

1970～80年代の中東各地での民主化

エジプト、ヨルダン、アルジェリア・・・

民主化すると「イスラーム復興」が顕在化

1989年：アルジェリア総選挙

イスラーム救国戦線の圧勝 → 軍政（欧米の支持）

「イスラームは反民主的だから、暴力で潰してもよい」？

(2) 1990年代から21世紀へ

中東でもっとも民主的なイラン

インドネシアの民主化

複数政党制に立脚するイスラーム政治の時代

2003年イラク戦争後の「中東の民主化」論と矛盾の激化

<資料：表1> 現在の主要なイスラーム政党

(地域的におおむね東から西へ配列。2005年末現在)

国名	政党名
フィリピン (非) ※ いずれも地方政党	オンピア党 [1986～] ウンマ党 [1997～] フィリピン・イスラーム党 [1994～] ムスリム改革党 [1997～]
インドネシア	開発統一党 [1973～] 国民信託党 [1998～] 民族覚醒党 [1998～] 正義党 [1998～] / 福祉正義党 [2002～] 月星党 [1998～] 改革星党 [2002～] インドネシア信徒連盟統一党 [2003～]
マレーシア	全マレーシア・イスラーム党 [1951～] 国民正義党 [1998～]
バングラデシュ	バングラデシュ・イスラーム党 (ジャマーアテ・イスラーミー) [1971～]
パキスタン (イスラーム共和国)	イスラーム党 (ジャマーアテ・イスラーミー) [1941～]
タジキスタン	イスラーム復興党 [1990～ ; 1998年に再合法化]
アフガニスタン ※ 2005年総選挙は政党制を採用せず	イスラーム党 [1975～] イスラーム党 (ハーリス派) [1979～] イスラーム統一党 [1990～]
イラン (イスラーム共和国)	イスラーム共和党 [1979～87] 建設の幹部党 [1996～] イスラーム・イラン連帯党 [1998～] イスラーム・イラン参加戦線 [1998～] イスラーム労働党 [1999～]
イエメン	イエメン改革連合 [1990～] 真理党 [1990～]
クウェート	ウンマ党 [2005, 未認可]
イラク (2004年に主権を回復)	イスラーム・ダアワ党 [1957～] イラク・イスラーム党 [40年代～] イスラーム革命最高評議会 [1982～] イスラーム行動組織 [60年代～] バドル組織 イスラーム・ファディーラ (美德) 党 トルコマン・イスラーム連合 クルディスタン・イスラーム協会
ヨルダン	イスラーム解放党 [不認可・非合法、1953～] イスラーム行動戦線党 [1992～]
パレスチナ	ハマース [1989～ ; 選挙参加は2005～] イスラーム国民救国党 [1996～]
レバノン	イスラーム集団 [1964～] ヒズブッラー (神の党) [1983～ ; 政党としては1992～]

トルコ	国家秩序党 [1970～71] / 国民救済党 [1972～80] / 福祉党 [1984～98] / 美德党 [1997～2001] / 公正と発展党 [2001～]、至福党 [2000～]
スーダン	ウンマ党 [1945～]
エジプト	社会主義労働党 [1977～；既存政党が綱領を変更してイスラーム政党化] ウンマ党 [1984～] 新ワサト党 [未認可]
チュニジア	復興（ナフダ）党 [イスラーム志向運動=1981～が 88 年改称、非合法]
アルジェリア	イスラーム救済戦線 [1989～；92 年、非合法化] 復興（ナフダ）運動 [1989～] 平和社会運動 [1991～；イスラーム社会運動から改称] 国民改革運動 [1999～]
モロッコ	公正と発展党 [1998～] 文明的代替党 [2005～] 復興と美德党 [2005～]
英国（非）	英国イスラーム党 [1989～]

国名にイスラームが明示されている場合は、国名のあと（ ）内に示した。（非）は、非イスラーム国。先行する党を継承した場合は、複数の名称を「/」でつないだ。

<参考文献>

- エスポズイト、ジョン；ジョン・ボル．2000．『イスラームと民主主義』宮原辰夫・大和隆 介訳，成文堂．
- 私市正年．2004．『北アフリカ・イスラーム主義運動の歴史』白水社．
- 私市正年・栗田禎子編．2004．『イスラーム地域の民衆運動と民主化』（イスラーム地域研究叢書 3）東京大学出版会．
- 小杉泰．1984．「シュエラー制度——イスラーム的民主主義の概念」『国際大学大学院国際関係学研究所紀要』2．
- ．1986．「現代イスラーム思想における主権と国家——スンニー派・シーア派の政治概念をめぐって」『日本中東学界年報』1．
- ．1989．「現代におけるイスラームの『再構築』——アラブ思想界の諸潮流」『現代思想』17(14)．
- ．1990a．「現代におけるイスラーム法と『立法』——イジュティハードをめぐる考察」『国際大学中東研究所紀要』4．
- ．1990b．「『ウンマ』を構想する思想家たち——現代アラブ思想における共同体と国家」黒田壽郎編『共同体論の地平——地域研究の視座から』三修社．
- ．1992．「サウジアラビアにおけるイスラームと民主化——『統治基本法』『シュエラー議会法』制定をめぐって」『中東研究』368．
- ．1994．『現代中東とイスラーム政治』昭和堂．
- ．1996．「スンナ派中道潮流の理念と戦略——新たな世界像をめざして」小杉泰編『イスラームに何が起きているのか——現代世界とイスラーム復興』平凡社．
- 編．1997．『中東諸国における民主化と政党・政治組織の研究』日本国際問題研究所．
- ．1998．『イスラーム世界』（21世紀の世界政治 5）筑摩書房．
- 編．2000．『21世紀の国際社会とイスラーム世界』日本国際問題研究所．

- 編. 2001a. 『増補イスラームに何がおきているか——現代世界とイスラーム復興』平凡社.
- . 2001b. 「イスラーム政党をめぐる研究視座と方法論的課題——比較政治学と地域研究の交差する地点で」『アジア・アフリカ地域研究』1.
- . 2002a. 『ムハンマド——イスラームの源流を訪ねて』山川出版社.
- . 2002b. 「イスラームの挑戦か、諸宗教の復興か——現代の宗教と政党を考える」日本比較政治学会編. 2002.
- . 2003a. 「啓典の支配力——イスラーム政治の再登場」青木保ほか編『パワー——アジアの凝集力』（アジア新世紀7）岩波書店.
- . 2003b. 「宗教と政治：宗教復興とイスラーム政治の地平から」池上良正ほか編『宗教とはなにか』（岩波講座・宗教1）岩波書店
- . 2005. 「民主化と安定に向けて——イラク戦争後の湾岸」日本国際問題研究所編『湾岸アラブと民主主義——イラク戦争後の眺望』日本評論社.
- . 2006（近刊）. 『現代イスラーム世界論』名古屋大出版会.
- 小松久男・小杉泰編. 2003. 『現代イスラーム思想と政治運動』（イスラーム地域研究叢書2）東京大学出版会.
- 澤江史子. 2005. 『現代トルコの民主政治とイスラーム』ナカニシヤ出版.
- 末近浩太. 2002. 「現代レバノンの宗派制度体制とイスラーム政党——ヒズブッラーの闘争と国会選挙」日本比較政治学会編『現代の宗教と政党——比較のなかのイスラーム』早稲田大学出版部.
- . 2005a. 「レバノン・ヒズブッラー——『南部解放』後の新戦略」『現代の中東』38.
- . 2005b. 『現代シリアの国家変容とイスラーム』ナカニシヤ出版.
- 富田健次. 1993. 『アーヤトッラーたちのイラン——イスラーム統治体制の矛盾と展開』第三書館.
- . 2003. 「革命のイスラーム——ホメイニーとハータミー」小松久男・小杉泰編『現代イスラーム思想と政治運動』東京大学出版会.
- 日本国際問題研究所編. 2005. 『湾岸アラブと民主主義——イラク戦争後の眺望』日本評論社.
- 日本比較政治学会編. 2002. 『現代の宗教と政党——比較のなかのイスラーム』（日本比較政治学会年報4）早稲田大学出版部.
- 松本弘. 2005a. 「アラブ諸国の政党制——民主化の現状と課題」『国際政治』141.
- . 2005b. 「イエメン民主化の10年」『現代の中東』39.
- 水島治郎. 2002. 「西欧キリスト教民主主義——その栄光と没落」日本比較政治学会編『現代の宗教と政党——比較のなかのイスラーム』早稲田大学出版部.
- メルニーシー, ファーティマ. 2000. 『イスラームと民主主義——近代性への恐れ』私市正年・ラトクリフ川政祥子訳, 平凡社.
- 横田貴之. 2005a. 「エジプトにおける民主化運動——ムスリム同胞団とキファーヤ運動を中心に」『中東研究』489.
- . 2005b. 「2005. 年エジプト大統領選挙——初めての複数候補制選挙の試み」『中東研究』490.
- 吉村慎太郎. 2005. 『イラン・イスラーム体制とは何か——革命・戦争・改革の歴史から』書肆心水.

Ahmad, Khurshid. 2000. Islam and Democracy: Some Conceptual and Contemporary Dimensions, *The*

Muslim World, 90(1).

- Allison, Lincoln. 1994. On the Gap between Theories of Democracy and Theories of Democratization, *Democratization*, 1(1).
- Brynen, Rex, Bahgat Korany, and Paul Noble eds. 1995. *Political Liberalization and Democratization in the Arab World*. Vol.1: Theoretical Perspectives. Boulder: Lynne Rienner.
- Butterworth, Charles E. 1995. Democracy and Islam, *Middle East Affairs*, 2(2).
- Diamond, Larry, Marc F. Plattner and Daniel Brumberg eds. 2003. *Islam and Democracy in the Middle East*. Baltimore and London: Johns Hopkins University Press.
- Esposito, John L. and James P. Piscatori. 1991. Democratization and Islam, *Middle East Journal*. 45(3).
- Grant, Audra K., and Mark A. Tessler. 2002. Palestinian Attitudes toward Democracy and its Compatibility with Islam: Evidence from Public opinion Research in the West Bank and Gaza, *Arab Studies Quarterly*, 24(4).
- Harik, Iliya. 1994. Pluralism in the Arab World, *Journal of Democracy*, 5(3).
- Heper, Metin. 1997. Islam and Democracy in Turkey: Toward a Reconciliation?. *Middle East Journal*, 51(1).
- Ibrahim, Saad Eddin. 1996. *Egypt, Islam and Democracy: Twelve Critical Essays*. Cairo: American University in Cairo Press.
- Kosugi, Yasushi. 1993. The Future of Islamic Revivalist Movements and Democracy, *Japan Review of International Affairs*, 7(2).
- 1994. Religion, Community and Political Culture in the Islamic World: Reflections on Millah, *Bullet of IMES, IUJ*, 8.
- 1996. Democratization and Political Culture in the Arab World: With a Special Reference to the Islamic Revival, *Korean Journal of the Middle East Studies*, 17.
- Ramage, Douglas E. 1995. *Politics in Indonesia: Democracy, Islam, and the Ideology of Tolerance*. London: Routledge.
- Richani, Nazih. 1998. *Dilemmas of Democracy and Political Parties in Sectarian Societies: The Case of the Progressive Socialist Party of Lebanon, 1949-1996*. Basingstoke: Macmillan.
- Robinson, Glenn E. 1997. Can Islamists be Democrats?: the Case of Jordan, *Middle East Journal*, 51(3).
- Sadowski, Yahya. 1993. The New Orientalism and the Democracy Debate, *Middle East Report*, 182.
- Salame, Ghassan, ed. 1994. *Democracy Without Democrats?: The Renewal of Politics in The Muslim World*. London: I.B. Tauris.
- Sisk, Timothy D. 1992. *Islam and Democracy: Religion, Politics, and Power in the Middle East*. Washington, D.C. United States Institute of Peace.
- Springborg, Robert. 1995. Legislative Development as a Key Element of Strategies for Democratization in the Arab World, *Arab Studies Journal*, 3(1).
- Stacher, Joshua A. 2002. Post-Islamist Rumbblings in Egypt: The Emergence of the Wasat Party, *International Journal of Middle East Studies*, 56(3).
- Wiktorowicz, Quintan. 1999. The Limits of Democracy in the Middle East: The Case of Jordan, *Middle East Journal*, 53(4).
- 'Abd al-Karīm, Ṣalāh. 1998. *Awraq Hizb al-Wasat al-Miṣrī*. Cairo: s.l. [エジプト・ワサト党の諸資料]
- 'Abd al-Khāliq, Farid. 1998. *Fī al-Fiḥ al-Siyāsī al-Islāmī: Mabādi' Dustūrīya: Al-Shūrā, al-'Adl, al-Musāwā*. Cairo: Dār al-Shurūq. [イスラーム政治法学において：憲法的原則：シューラー、正義、

平等]

- 'Affī, Muḥammad al-Ṣādiq. 1980. *Al-Mujtama' al-Islāmī wa al-'Alāqāt al-Duwalīya*. Cairo: Maktaba al-Khānjī. [イスラーム社会と国際関係]
- al-Anṣārī, 'Abd al-Ḥamīd. 1981. *Al-Shurā wa Atharuhā fī al-Dīmuqrāṭīya*. Cairo: Maṭb'a al-Salafīya. [シュエラーと民主主義におけるその影響]
- 'Awaḍ, Hudā Rāghib, and Ḥasanayn Tawfīq. 1995. *Al-Dawr al-Siyāsī li-Jamā'a al-Ikhwān al-Muslimīn fī Zill al-Ta'addudīya al-Siyāsīya al-Muqayyada fī Miṣr: Dirāsa fī al-Mumārasa al-Siyāsīya 1984-1990*. Cairo: Al-Maḥrūsa. [エジプトにおける限定的な政治的多元性の下でのムスリム同胞団の政治的役割：政治実践の研究 1984-1990年]
- al-Dīb, 'Abd al-'Azīm, ed. 2004. *Yūsuf al-Qaraḍāwī: Kalimāt fī Takrīmihī wa Buḥūth fī Fikrihī wa Fiqhihī Muḥdā ilayhī bi-Munāsaba Bulūghihī al-Sab'īn*. 2 vols. Cairo: Dār al-Salām. [ユースフ・カラダーウィー古希記念論集]
- Ghaliyūn, Burhān *et al.* 2005. *Ḥuqūq al-Insān: Al-Ru'ā al-'Ālamīya wa al-Islāmīya wa al-'Arabīya*. Beirut: Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-'Arabīya. [人権：国際的、イスラーム的、アラブ的な観点]
- Ībish, Yūsuf, and Yasushi Kosugi eds. 2005. *Turāth al-Fikr al-Siyāsī al-Islāmī*. Beirut: Turāth [イスラーム政治思想選集]
- al-Jawharī, Muḥammad al-Jawharī Ḥamad. 2005. *Al-Dīmuqrāṭīya al-Amrīkīya wa al-Sharq al-Awsaṭ al-Kabīr*. Cairo: Dār al-Amīn. [アメリカ的民主主義と大中東]
- al-Kātib, Aḥmad. 1998. *Taṭawwur al-Fikr al-Siyāsī al-Shī'ī min al-Shūrā ilā Wilāya al-Faqīh*. London: Dār al-Jadīd. [シーア派政治思想の発展：シュエラーから法学者の監督へ]
- al-Kawārī, 'Alī Khalīfa ed. 2002. *Al-Khalīf al-'Arabī wa al-Dīmuqrāṭīya: Naḥwa Ru'ya Mustaqbalīya l-Ta'zīz al-Masā'ī al-Dīmuqrāṭīya*. Beirut: Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-'Arabīya. [アラブ湾岸と民主主義：民主的営為の強化のための将来的展望をめざして]
- Khūrl, Yūsuf Q. ed. 1989. *Al-Dasātīr fī al-'Ālam al-'Arabī 1839-1987*. Beirut: Dār al-Ḥamrā'. [アラブ世界における憲法 1839-1987]
- Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-'Arabīya ed. 1984. *Azma al-Dīmuqrāṭīya fī al-Waṭan al-'Arabī*. Beirut: Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-'Arabīya. [アラブ世界における民主主義の危機]
- , 2004. *Al-Dīmuqrāṭīya dākhila al-Aḥzāb fī al-Buldān al-'Arabīya*. Beirut: Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-'Arabīya. [アラブ諸国の政党内の民主主義]
- al-Markaz al-Lubnānī li-Dirāsāt. 1993. *Al-Intikhābāt al-Ūlā fī Lubnān Mā ba'da al-Ḥarb*. Beirut: Dār al-Nahār. [内戦後のレバノンにおける最初の総選挙]
- al-Qaraḍāwī, Yūsuf. 1986. *Al-Fiqh al-Islāmī bayna al-Iṣāla wa al-Tajdīd*. Cairo: Dār al-Ṣaḥwa. [イスラーム法学の原初と革新]
- , 1993. *Malāmiḥ al-Mujtama' al-Muslim alladhī Nanshuduhu*. Cairo: Maktaba Wahba. [望ましきイスラーム社会の特徴]
- al-Shawbikī, 'Amru ed. 2004. *Islāmīyūn wa Dīmuqrāṭīyūn: Ishkāliyat Binā' Tayyār Islāmī Dīmuqrāṭī*. Cairo: Markaz al-Dirāsāt al-Siyāsīya wa al-Istirāṭījīya bi-l-Ahrām. [イスラーム主義者と民主主義者：イスラーム民主主義的潮流の構築の諸問題]

同志社大学一神教学際研究センター
部門研究1・2合同研究会「一神教世界にとっての民主主義の意味」

アメリカ建国の理念——「近代」と「宗教」の相克

古矢 旬（北海道大学）

1. はじめに——問題の所在

◆アメリカ建国の理念？——統治規範とアイデンティティ

独立宣言と合衆国憲法／それらが提示するものについての長い論争
アメリカ人というアイデンティティの核心——自由・徳・商業
「理念」と「歴史」

◆アメリカ国民社会の「例外性」

「例外」の意味
選民思想／社会主義／世俗化

◆アメリカ国民形成における宗教問題

——「近代と宗教」問題の一断面＝世俗権力による宗教利用＝社会統制の手段としての宗教
参考：渡辺浩氏「『教』と陰謀」（『韓国・日本・「西洋』』
慶應義塾大学出版会、2005所収）の問題提起

——啓蒙と理性の時代における「国家形成」
——解決すべき問題としての宗教的多元性
——近代的市民の道徳的形成と宗教／徳と信仰の関係

◆アメリカ史における宗教問題

——自立（孤立）した理性的個人からいかに社会秩序を形成しうるのか
——科学革命（ニュートン、ダーウィン、マルクス）と宗教
——国家的危機と信仰復興
——神学的自由主義と福音主義
——新たな政教一致運動【資料1】

2. 「建国」における宗教問題——「非キリスト教国家」と「プロテスタント社会」

1) 植民地社会秩序の特性

ハイアラーキー、安定性、画一性、権威の欠如→「社会性」「共同性」をいかに創り出すか。
ピューリタンの正教国家はこの問題に対する一つの答え。
救いにいたる宗教過程（「悔悟(conviction)」「回心(conversion)」「聖化(sanctification)」）

が世俗の統治過程と不可分。神学の優位。神学者の社会的主導性。

この祭政一致による社会統制の不安定性→「魔女狩り」(1692年 Salem)

伝統的ピューリタニズム(コングレーション派教会と聖職者)の社会的主導権の衰退。

宗教的多元性と「信教の自由」(ロードアイランド)

2) 啓蒙の波及

ニュートン革命(科学革命 I)⇒人間の理性をとおして創造の神秘を解明しようという信念の登場

理神論=神は宇宙の展開によってのみ自らを現す。啓示の否定。

ユニテリアン=キリストの神性の否定、人間の理性への信頼

啓示神学(神による究極的な真理の提示)→キリスト教の場合、イエス・キリストにおける神の顕現。啓示の網羅的収録=聖書

□

自然神学(啓示によらず、自然理性にのみ基づく神学)→神の存在や唯一性は自然理性によっても認識可能

3) 大覚醒

Jonathan Edwards (Northampton revival, 1734)/George Whitefield (1739年に始まる巡回)→多数のエピゴーネン=New Lights。福音主義的な熱狂(⇔冷厳なピューリタニズム)。

◆ベンジャミン・フランクリンの啓蒙主義

——啓示宗教への疑い【資料 2,3】と理神論への傾斜と疑問【資料 4】

——啓示をも理神論をも相対化する「有用な徳性」の規準(=近代的個人主義の倫理的基礎)の提示。【資料 5】

——世俗道徳、生き方の規準としての道徳が目的であり、(さらにはそれによって得られる功利が目的であり)、宗教は手段。→市民宗教への傾斜

——宗教的覚醒運動へのアンビヴァレンス(ジェントリーとデモクラットの間)【資料 6】

——アメリカ社会(とりわけペンシルヴェニア)の宗教的多元性→教派間共存原理へ【資料 7】

4) 政教分離原則の確立【資料 8】

Jefferson's criticism: Christianity as an "engine for enslaving mankind, a mere contrivance to filch wealth and power"

独立後の各州における政教分離原則の樹立や disestablishment

世俗国家としての合衆国建国(人間の自由意志にもとづく国家建設)⇔divine rule

∴共和主義自体が civic であり、humanitarianism に立脚

大覚醒⇒聖職者権威の衰退≠宗教の衰退

宗教と政府との分離は、そのいずれにとっても害はなかったという認識。【資料 9】

3. 「国民社会」の発展と宗教問題

1) 建国の理念の変容

革命の成功は、ヨーロッパ・モデルの単一国家 (one king, one church, and one tongue) を創出したわけではない。

階層的、文化的、民族的、人種的に多元的な社会を包摂する連邦国家

⇒ ∴ 多様な (可能的な) 国民的アイデンティティの相克

19世紀初頭：全国規模の印刷資本主義に支えられた包括的一元的なナショナリズムは未成しかし、革命期共和主義は、西部への新開地の展開とともに徐々にデモクラシーと民衆的資本主義に道を譲りつつある。

「労働」の意味変容／上昇的な社会的流動性の肯定 (「丸太小屋」神話の形成期)

self-made man の神話

2) 第二次大覚醒

政教分離原則に基づく世俗的な共和主義が、宗教をより理性化し、脱神秘化するだろうという Jefferson の 1822 年の予想。「現在の若者は全て死ぬときはユニテリアンになっているだろう」。⇔【資料 10】プロテスタント社会のネットワーク

その原因

大覚醒の遺産、信仰復興運動のパターンの存在

共和主義的な徳の衰微 (∴ フランス革命／資本主義社会の勃興)

教派・性別・人種を越えた民衆の宗教的覚醒

世俗社会の「進歩」と宗教的千年王国の到来との混交

労働・営利活動・そのための世俗的個人主義的徳の勧奨

◆ベンジャミン・フランクリンの「アメリカ化」

——ウェーバーが、その内に典型的な「資本主義の精神」を見たフランクリン像は革命以後に形成された。

——貧しい家の出自、奉公人から印刷業者へ、ジェントリーから国家指導者へという伝記
⇒ 貧困から国際的名士への立志伝 ⇒ 貧困な青年層に出世の可能性を示す

——近代資本主義に適合的な「徳」を内面化するための世俗的な方法

——競争、物欲、金銭欲、自己利益の追求と社会改良の使命感との共存

3) 奴隷制とナショナル・アイデンティティ

奴隷制下南部の「労働」観 ⇔ 北部の近代的個人主義

北部の産業主義、市場社会と適合的な人間類型が、南北戦争以後アメリカのナショナル・タイプとなる。

4. 終わりに——アメリカ例外論再考

◆「アメリカにはなぜ社会主義はないのか」

この問いの時代的制約。∴冷戦以後／グローバルな新自由主義の波⇒「歴史的制約要因のなかったアメリカがむしろ法則性にはなっているのではないか」という逆の問いかけも可能？ブッシュの *Ownership Society* 論（ロック原理主義？）

◆「アメリカは近代化の先端を走りながら、なぜ深く宗教的なのか」

所有的個人主義の原理的な追求を許す社会の「共同性」原理はどこに求められるのか。そのように問いを立て直すならば、そのような社会ほど、「自覚的に」宗教を求めざるをえないことになろうか？

【参照】

Gordon S. Wood, *The Americanization of Benjamin Franklin* (New York: The Penguin Press, 2004)

Joyce Appleby, *Inheriting the Revolution: The First Generation of Americans* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2000)

Frank Lambert, *The Founding Fathers and the Place of Religion in America* (Princeton: Princeton University Press, 2003)

【引用資料】

【資料 1】

"There is no such thing as separation of church and state in the Constitution. It is a lie of the Left and we are not going to take it anymore."

Pat Robertson, November 1993 during an address to the American Center for Law and Justice

【資料 2】「ピューリタニズム（最も広い意味での）偉大な人物は、すべて青年時代に予定説の陰鬱な厳粛さの影響をうけて成長し、予定説を彼らの出発点としていた。・・・後年きわめて自由な思想の持ち主となったフランクリンもそうだった」。 (マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、岩波文庫、176 ページ)

【資料 3】「私の両親は早くから私に宗教心が起るようにし、幼年時代を通じて、敬虔に私を非国教派の方向へ導こうとしたのである。ところが、いろいろ本を読んでも、いくつかの点に対して異論が出ているので、そうした点について次々に疑問を持つようになり、そのあげく、一五歳になるかならない頃には、天啓そのものさえも疑いはじめたのである」。 (『フランクリン自伝』、岩波文庫、93 ページ)

【資料 4】 (反理神論の書物を読むうちに、逆に) 「こうしてけっきょく私はまもなく完全な理神論者になった。・・・(しかしこの背教的議論を受け入れた人びとの中には、世俗的に受任しがたい非道な行いには知るものが少なくなく) 「この教義は、真実であるかも知れないが、あまり有用ではないのではあるまいかと私は思い始めた」。 (94 ページ)

【資料 5】 (逆に) 「天啓は実際それ自身としては私にとってなんらの意味も持たず、ある種の行為は天啓によって禁じられているから悪いのではなく、あるいは命じているから善いというものでもなく、そうではなくて、それらの行為は、あらゆる事情を考え、本来われわれにとって有害であるから禁じられ、あるいは有益であるから命じられているのであろうと私は考えた」。 (95 ページ)

【資料 6】 「1739 年・・・ホイットフィールド氏がフィラデルフィアへやってきた。はじめは説教を許した教会もあったが、牧師たちはやがて彼を嫌って説教壇を提供することを拒んだので、やむをえず彼は野外で説教を始めた。その説教を聞きに来る各宗派の群衆の数はおびただしいものであった。・・・やがて現れた町の住民たちの態度の変化には驚くべきものがあつた。今まで宗教については考えもせず、まるで無関心であつたのが、急に世界中が信心深くなってきたかのようで、夕方町を歩くと、どの通りでも、方々の家で賛美歌を歌っているのが聞こえてくるのであつた」。 (同、169 ページ)

【資料 7】(1751 年ペンシルヴェニア大学設立に関して)「ことわっておかねばならないが、この [大学の] 建物は各宗派の信者の献金で建てられた者であるから、土地家屋の管理を託すべき委員の指名には、ある一つの宗派が優勢を占めることのないように、とくに注意が払われていた。・・・それで各宗派から一名ずつ、つまり英国国教派から一名、長老教会派から一名、浸礼派から一名、モラヴィア派から一名という風に指名し、もし死亡のため欠員ができた場合には、寄付者の中から選挙によってこれを補充することになっていた。たまたまモラヴィア派の委員が同僚と仲がよくなかったため、彼が死ぬと、委員たちはモラヴィア派からはもう委員をとらぬことに決めた。ところで、他の派から選ぶとすれば、同じ宗派から委員が二人出てくるわけで、これを避けるにはどうしたらよいか、次の問題になった。数人の名前が出たが、右の事情で意見が一致しなかった。その中に一人が私の名をあげ、私は一個の誠実な人物というだけで、どの宗派にも属していないからと言ったところ、一同なるほどということになって私を選び出した」。(190～91 ページ)

【資料 8】合衆国憲法

Amendment I

Congress shall make no law respecting an establishment of religion, or prohibiting the free exercise thereof; . . .

【資料 9】James Madison to Robert Walsh, March 2, 1819.

「革命以来、宗教的教育は盛んになっている。・・・かつて公的費用によって公定された [古い教会は] おおかたのところ壊滅してしまっただが、[その他の教派の] 教会は増加してきており、なお増加し続けている。・・・牧師たちの数とその精勤ぶりと道徳性も、人々の献身も、完全な教会と国家の分離によって、目に見えて増大してきている」。

James Madison to Rev. Adams, n.d. 1832.

「宗教に対する法的な補助が撤廃されてから現在に至る 50 年の時の流れが明らかにしたことは、宗教は政府の支援を必要としないということだけではなく、政府は宗教をその管轄範囲から除いたところで困ることはほとんどないということである」。

【資料 10】教派教会数

	1780 年	1860 年
Congregationalist	750	2,200
Presbyterian	500	6,400
Methodist	--	20,000
Baptist	400	12,150
Catholic	50	2,500

2006.01.21.

同志社大学一神教学際研究センター 部門研究1・2合同研究会「一神教世界にとっての民主主義の意味」

フランス共和国とユダヤ——『ライシテ（世俗性）』理念の試金石

菅野賢治（東京都立大学人文学部助教授）

発表要旨ならびに統計、文献資料

三部構成	I フランスの21世紀を振り返る	(15分)
	II 「ライシテ（世俗性）」とは何か	(15分)
	III 「ライシテ」議論におけるフランス・ユダヤの存在意義	(15分)

I フランス21世紀最初の5年間を「民族」「宗教」「世俗性」「歴史・記憶」の観点から振り返る

→ 別途配布資料を見ながら

全体の印象

- 1) 20世紀の末にもまして、21世紀のフランスにおいては、民族、宗教、あるいはそれをめぐる歴史と記憶、というテーマが重要な意味をもってきている
- 2) それぞれの言論人が、それぞれの立場から、それぞれのインパクトをもって発言を行っているけれども、共通しているのは、皆、自分自身が最後の最後の言葉を言おうとする余り、最後のところで何かに躓いている
- 3) 皆が皆、自分自身の主張が、目に見えない、しかしどこかで組織化されている抑制の壁によって遮られている、と感じており、それをあえて抑圧をはね除けながら口にしているのだ、という、「ポリティカリー・コレクト」の犠牲者としての構えから物事を述べている
- 4) それぞれがそれぞれの立場を代表しつつ、自分たちこそは歴史上の最大の被害者であった、と強調したがる傾向。
- 5) しかし、それらもすべて、21世紀初頭の現実をなんとかできないか、と思いつつ、しかしそれをどうにもできない、それぞれの苛立ちから発しているのだろう。これも「国民的議論」の一形態なのであろう。

II 「ライシテ（世俗性）」とは何か？

参考文献 小泉洋一 『政教分離と宗教的自由：フランスのライシテ』、法律文化社、1998年

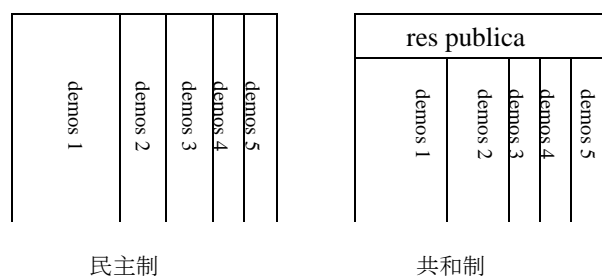
同 『政教分離の法：フランスにおけるライシテと法律・憲法・条約』、法律文化社、2005年

Jean Baubérot のフランス語の著作（多数）

基本的統計数値（数種類の統計から概数を掲げる）

	1872年	1996年
フランス総人口	3 6 0 0 万人	5 7 0 0 万人
カトリック教徒	3 5 0 0 万	4 5 0 0 万
プロテスタント	7 0 ~ 8 0 万	9 0 万
ユダヤ教徒	8 ~ 9 万	5 0 ~ 7 0 万
無宗教	8 万	
イスラーム教徒		4 0 0 ~ 5 0 0 万
仏教徒		6 0 万
東方正教教徒		2 0 万

民主制と共和制（菅野自身による概念図）



「ライシテ」不徹底の例として文化に根づいてしまった点

- ・ 暦、休日、祝日
- ・ 「右」の特権視、「左」の蔑視

(Cf. Vilma Fritsch, *La Gauche et la droite, vérités et illusions du miroir*, 1967)

III 「ライシテ」議論におけるフランス・ユダヤの存在意義

フランス・ユダヤに対して「ライシテ」原則違反とも呼べるものが行われた例

- ・ フランス革命当時、革命政府支持を表明する「宣誓」(serment) のあり方
憲法制定議会議員クレルモン＝トネールの発言

「民族 (nation) としてのユダヤ人には何も与えまい。個人 (individu) としてのユダヤ人にすべてを与えよう」

- ・ ドイツ占領期、ヴィシー体制下 (1940-45) のユダヤ人「身分規定」

アラン・フィンケルクロート (Alain Finkielkraut, 1949-) の言う、共和国への「愛」と「憎悪」

Alain Finkielkraut, Benny Lévy, *Le Livre et les livres, entretiens sur la laïcité*, 2005

エステル・ベンバッサ、ジャン＝クリストフ・アティアスの近著『ユダヤ人に未来はあるか？』

Esther Benbassa, Jean-Christophe Attias, *Les Juifs ont-ils un avenir ?*, 2001